

## 「エンカンタダス」の偶像破壊と文化混淆（１）

石 井 光 子

“The Encantadas or Enchanted Isles”<sup>1)</sup>は、Putnam’s Monthly Magazineに1854年3月1日号に第4編まで、4月1日、5月1日号に各々3編ずつ、スケッチと称する10編を3回に分けて、Salvator R. Tarnmoorなる人物によるガラパゴス諸島に題材を採る紀行文の体裁で掲載された<sup>2)</sup>。むろん、ガラパゴス諸島は、1839年に海軍省への報告書の一部として出版されたダーウィンの『ビーグル号航海記』によって、初めて一般読者がその存在を意識し始めた程度の辺境の群島である。ただし、『種の起源』は、1859年になるまで出版に至らず、18世紀から囁かれてはいた進化論が表面化して物議をかもし事になるまで20年かかっている。むしろ、博物学が趣味として流行していた時代であるから、単に、時流に乗った雑誌読み物である。アイスランドの地名を姓とし、ラテン系の個人名を持つ中南米出身と思しき無名の著者が、「魅せられた島々」と言う地名のみを、それも、スペイン語の地名に英語訳を付して表題として月刊誌に寄稿しているのである。多少、奇妙な感想が書き込まれて、奇矯な著者像を垣間みせる事はあるものの、風景描写に続いて、博物学的好奇心を満たす観察記録、観光案内風の伝説と歴史、絶海の孤島に敢えて居住する変人達の紹介など、逸話をつなぎ合わせた旅行記として読み飛ばされる類の作品である。

1856年には、この架空の著者名をはずして*The Piazza Tales*に収録されたものの、メルヴィル生存中に再版されることはなかった。メルヴィルの乗り組んだAcushnetは、1841年秋、約3週間にわたりガラパゴス諸島内を航行し、数回上陸しており、また、1843年にも2度、メルヴィルの乗り組んだ艦船はこの周辺を航行している（NN 602-603）。メルヴィルが実際に訪れた経験に材を採り、いつものように過去の探検家達の著書から借用し、想像力で膨らませた作品である。一貫したテーマと思しき纏まりも無いように読めるスケッチ集である。原稿料のために書き上げた紀行文と見なされても当然であろう。昨今においても、『白鯨』の描写的部分を描き出した視点や語り口を踏襲する作品として<sup>3)</sup>、あるいは、書かれなかった大作のためのプロット、つまり、メルヴィルが出版社に提示した「象亀狩りを主題とする海洋冒険物語」が第2スケッチに、また、夫によって孤島に捨てられたクウェイカー教徒を描く「アガサ物語」が第8スケッチと重なり合うため<sup>4)</sup>、作家論を展開するための資料に近い作品として紹介されがちである。独立した作品としての批評・解釈は、「新批評」の時代を経験しておりながら、メルヴィルの諸作品に現れる方向性の異なるライト・モティーフとの対照や類似性の指摘に留まり、突如、手短に、あるいは、批評家の困惑を伝えながら、なぜか、全宇宙の中での人の実存的意義を問う作品と結論づけられるのである。Newmanは、1986年までのメルヴィル研究者達の様々な解釈と批評の客観的な総括を試みているのであるが、“The Encantadas”に関してのみ、評者達の戸惑いを全面に押し出さざるを得なくなっている。

What is it? What does it mean? These two apparently simple, but ultimately complex and related questions of form and content sum up the central issues that have dominated the critical

history of “The Encantadas,” a piece whose structure is suspect and whose meaning is enigmatic. (Newman 192)

彼女は、数々の批評を例示してみせるが、Fogleですら、「我々が評価し慣れていない類の作品」(Newman 92) と訴えた上で、「究極的な主題である人類の墮落と、この世は複雑そのものである」と言う事実の持って回った肯定」(Newman 192-193) をテーマとする作品として「魅せられた島々」を是認しているようである。これは、よく理解できないが、本質的問題を扱っている感じがするので意義がある感じがする、と言う事ではないのか。Fisherも “literary miscellanies” と捉えるべき作品であり、Tarnmoor の仮面をかぶったメルヴィルが “gothic theatricality”<sup>5)</sup> の習作を試みたかのような結論を引き出している。Karcher のみが、奴隷制度の継続がもたらすアメリカ合衆国の黙示録的終焉を警告する作品と位置づけ、後半のスケッチに現れる島々の体制にアメリカ大陸全域における植民活動の実像を見たり<sup>6)</sup>、登場人物にプロスペロとカリバンの融合を発見して、奴隷制度が内包する拡張主義 (Karcher 116-120) の糾弾を試みる作品としている。

各スケッチが、主としてエドモンド・スペンサーの『神仙女王』からの引用を題辞としているので、作品を寓話と見なし、登場人物や、各スケッチそのものを、勇気・忍耐・発見・幻惑・幻滅・克己心・隷属・孤独・裏切りなどの具象像とする解釈もある。しかしながら、Harold Beaver は、その注において、“... it is difficult to see what relation the subject-matter of these cantos bears to the subject-matter of *The Encantadas*—neither suicide nor sex—unless it is the Catholic faith of patient Hunilla resisting despair.”<sup>7)</sup> と題辞の導入そのものに疑義を示唆している。題辞が伝統的美徳や運命観など、抽象的な主題を凝縮して提示し、本文が、その具体例を展開すると言う形式に則った解釈法では整合性を感じられないからである。しかし、擬古典趣味の『神仙女王』からの詩文に続いて、畳み掛けるように比喩を重ねる冗漫な与太話のようにも聞こえる話者の語り口で展開する本文との違和感そのものにメルヴィルの意図を嗅ぎ取ることは可能であろう。

英文学史上最後の騎士道叙事詩『神仙女王』<sup>8)</sup> は、古典古代の形式を遵守し、ケルト伝説とキリスト教とを融合させながら、騎士たるものの道徳的態度の模範を示すべく、12章で完結する筈ながら、“Mutabilitie and Constancie” を主題とする第7章の約5分の1程で放棄されている。大航海時代の先鋒となったスペインでは、まもなく、中世騎士道物語りのパロディーが書かれようとしていた時代である。普遍的・永劫不滅の美徳を具体的な物語に描き出すべく、「変容と不変」を主題にしようとして頓挫したとは考えられないだろうか。スペンサーは、生年も定かでない (c 1552-1599)、職人階層の出身で、豪商の援助によりケンブリッジ大学に至り、エリザベス一世すらを悩ませた程の清教徒派に属し、後、エリザベスの寵臣 Sir Philip Sidney や、Sir Walter Raleigh の後援を受け、“poets’ poet”, “the prince of poets in his time” としてウェストミンスター僧院に葬られている (de Selincourt vii-xl)。この階層上昇の過程でスペンサーは、16世紀末の英国そのものの改革を経験したと言えよう。彼が、最初の出版作を献辞したシドニーは、熱烈な反カトリック思想を標榜し、エリザ朝きってのルネサンス的宮廷人として新しい英国詩の先駆者となり、1586年に、銃の導入された戦に軽装で出かけ騎士道の華と散った。この一部始終をスペンサーは、赴任先のアイルランドで聞き知ったであろう。そして、アイルランド植民地を訪れたラリーが、執筆中の『神仙女王』を認め、出版させたのである。ロアノウク、及び、ガイアナ植民の失敗の責めを負い、エルドラド発見を命じたジェームズ1世に処刑されるラリーである。ラリーは、進取の氣勢に富む郷紳階層出身者をロアノウク島に派遣したつもりであった。そして、この郷紳達は、冒険を楽しみ、文明人に黄金を献納するために押し寄せるエルドラドの原住民にかしづかれるつもりで、従者や音楽家や調香師を伴って行き、飢えて原住民の集落を略奪し、入植地は壊滅した。3年後

に英国製の火縄銃を、毛皮・穀物・黄金と交換するべく訪れた補給船は、入植地の消滅を報告する事となる<sup>9)</sup>。ラリーの新大陸入植計画は、願望とお伽噺を混同して信じ込む三歳児の夢に等しいものであった。彼が、ロアノウク島入植の指揮を取らせた従兄弟のSir Richard Grenville は、スペイン無敵艦隊との遭遇・海戦・撃退に功を奏しており、ラリー本人が、スペイン勝利の偽情報を打ち消すべく書き上げた海戦の報告書とも言うべき散文を残している<sup>10)</sup>。旧世界のスペイン人には現実的に対応できたが、新大陸は願望成就の夢の果てに霞んでいたであろう。さらに、アイルランド遠征を経験した郷紳層が、カリブ海での海賊行為に転じた例が多く<sup>11)</sup>、スペンサーはイギリスの初期の新大陸進出活動の目撃者であった。すでにイタリアでは、後期ルネサンスからバロックに移行しつつあった時代に騎士道精神に則ってあっけなく死ぬシドニーの時代錯誤とも言える生涯を見届け、ロアノウク入植の失敗や、無敵艦隊撃破の知らせを宮廷周辺で聞き、アイルランド植民地の経営に携わりながら、再び、ラリーがガイアナの入植にも失敗した事を聞き及んだ詩人である。スペンサー自身が、変革そのものの時代にあった。

聖書が言及しなかった新大陸、ノアの箱船には乗り込んでいなかったはずの動植物の存在、さらに、ノアの3人の息子の系統に分類できないはずの「インディアン」の存在を咀嚼しないまま、ちょうど、十字軍以来、絹・砂糖・茶・真珠・黄金などの贅沢品の産地としてIndias, Cathay, Jipang を、アラブ世界に濾過された、お伽噺の領域のように嚙下してきた視点で、地理的実在となった新大陸を貪ろうとしていた時代である。イスラム勢力を駆逐したばかりのスペインが、新大陸の金と銀を散財し、ヨーロッパの物価が高騰し、後進国イギリスすらが揺れ動いた時代である。ヨーロッパ大陸の辺境の島国として、ルネサンスにも、大航海時代にも、宗教改革にも乗り遅れた英国が、突然、アイルランド植民地の西に、大西洋と新大陸が存在する事に気付き、安定した世界観を再構築できないままに、新大陸植民計画に直面した状況そのものを具現する詩人であろう。

着目すべきは、現代英語の理解力のみで何とか読める懐古趣味の英叙事詩からの抜粋をメルヴィルが各スケッチの題辞に選んだことである。古典古代から続いた海洋叙事詩、異境冒險譚、騎士道探求物語が繰り返し伝統的教養の基盤として幼少期の想像力形成を培い、さらに、この伝統に連なる辺境開拓物語が、史実・虚実の混淆を重ねて、話者と読者の固定観念を形成し、反映し、再生産の末に、19世紀中葉のアメリカ合衆国の読者層の世界観、つまり、メルヴィルが対応せざるを得なかった読者層の世界観を形成しているのである。ちょうど、連綿と続いてきた西洋文明の想像力の伝統に与しながら斬新であろうとしたシドニー、ラリー、スペンサーが、歴史的変化に対応し切れずに飲み込まれた姿を、今、現在、19世紀中葉のニュー・ヨークを中心とする社会の現実の中に居て、腑に落ちないままに受容した固定観念、黙殺してしまった現実、その裏に押しつぶされたままになっている認識力を抱えている筈の読者に投げかけ、謎かけ、謎解きに誘う試みである事を宣しているように思えるのである。

むろん、メルヴィルの作品であるから、基本的に二重構造にはなっている。スケッチ1の表題の“The Isles At Large” からして、人を喰ったものである。全体像としての島々を表してはいる。島々の概観をまず紹介しようとする地誌学的読み物として順当な書き出しである。しかし、“at large”とは、逃走中の犯罪者と同様の状況にある事をも意味する。そしてまた、例えば、ambassador at large (無任所大使)は、アメリカ合衆国の国務長官に相当する、特定の任地に拘束されない究極の外交官を思わせもするが、人脈だけは広い人物のための名誉職という場合もある。つかみ所のない野放しの群島の概観とでも理解すべき題である。そもそも、この「魔法にかけられた」島々が、ガラパゴス諸島であるとは、決して読者には伝えられないのである。博物学

誌めかしてガラパゴス象亀を紹介する際に、この亀の名前が、エンカンタダスの別名ともなっている (NN 135) と、ダッシュに囲んで、あたかも、話のついでであるかのように、それも、通常の Galapagos ではなく、Gallipagosと綴って言及するのみである。このエンカンタダスそのものに関する固有名詞として最初に提示される地名は“Albemarle”であり、少なくとも合衆国南部に足を踏み入れた事があれば、ロアノウク河口の“Albemarle Sound”を考えるであろうし、また、カリブ海周辺に親しんでいれば、チャールズ 2 世の王政復古を可能にし、後、“Duke of Albemarle”と叙爵された George Monck, or, Monk 将軍を想起するはずの地名である。さらに、この“Albemarle”すら、第 1 スケッチの全 15 段落の第 9 段落が初出であり、次の段落で、太平洋が言及されて、初めてラリーの入植地ロアノウク島、チャールズ 2 世が初代総督を任命したカロライナ植民地の中心地、英国領カリブ海域植民地経営の隠れた立役者とは縁の無い太平洋岸の離島と限定されるのである。それでも、ダーウィンが 1839 年に博物誌を発表し、後、進化論を実証する事となる、雨量も豊かで、既知の動植物の亜種にあふれる実在のガラパゴス諸島をほのめかしながらも、物語の終わりまで、この島々はエンカンタダスとして言及され続け、実は、徹頭徹尾、メルヴィルが創造した、目くらましを続ける虚構の島々でしかありえないという架空の真実が貫かれるのである。

メルヴィルが第 1 スケッチにあてがう『神仙女王』からの題辞は、「渡し守」が重々しく、彷徨える人を惑わせ、虜にってしまう浮島を指し示す部分、続いて、腐肉を貪る墓と墓守の梟を描き出す部分であり、スペンサーよりは、むしろ、ダンテを想起させる情景である。地獄巡りを示唆する部分を選んでおり、エンカンタダスの荒涼、茫漠たる情景を印象づける効果を上げる題辞である。さらに、スペンサーがダンテから借用したように、ただし、異なる意図をもって、メルヴィルがスペンサーの詩文を利用するつもりである事を宣言しているようにも思えはする。

呪いの地を思わせる詩文に続いて、突如、口語体話者が語りかける物語へと調子は一転する。都市周辺の殺伐とした広がりの中の塵芥処理場に打ち捨てられた灰の山を 25 程思い浮かべ、その灰山を本物の山に拡大して、周辺の空き地を海だと想像して見ろ、と言う冗談めかした語り口である。エンカンタダスは、大海に浮かぶ死火山の集まりであり、まるで、最後の審判により焼き尽くされた後の世界と見まがうような群島だと話者は言う。放棄された墓地、遺跡となる古代都市、巡礼なら感動するであろう死海ほどにも人類の足跡を感じさせず、ユダヤの民が彷徨したエドム砂漠よりも茫漠として、シリアの太陽に灼かれる割れた瓢箪のように乾いていて、ラザロの指先の水滴を待ち望むかのようなのである。ジャッカルのみが住処とするバビロンの荒れ野よりも生存に適さない (NN 126-127)。聖書への引喩とともに、異教の冥界プルートやタルタロスと、苛酷な自然を想起させる実在の地名が列挙される。グリーンランドの氷河ほどにも変化や季節の訪れを感じさせず、雨も決して降らない、アンデス山中のアラカマの塩砂漠、灼熱の太陽に焦がされる溶鉱炉の燃え滓のような所である (NN 126-127)。グリーンランドよりも荒涼たる不毛の炎熱地獄とは、16 世紀以来ヨーロッパがアフリカ内陸部に抱き続けたイメージである<sup>12)</sup>。使い古された比喩は、かえって言及しない事で印象付けられるのである。古典古代、旧約聖書の世界、現実に存在する地名に、塵芥焼却場や、溶鉱炉の燃え滓のような、都市部の消費文明や工業化社会の残骸に重ね合わせて描写されるこの不思議な島々は、黙示録の業火に焼き尽くされて浄化を経て神の領域に入った異界でもあって、神話と歴史と地理と日常とを全て燃り合わせる隠喩・象徴・記号として与えられている。

さらに、この赤道直下の焦土の島々の周辺では風が頻発しながら、海岸線の岩々には大波が碎け、渦が巻き続け、潮流がせめぎ合うのである。焼け果てておりながら噴火を続ける島々、日中は火山灰で薄暗く、夜間に火を噴いて、航海者の目をくらませ、常識では推し量れない潮流と風

を伴って海図を誤らせ、100レグア程の距離をおいて別々の群島を印すほどで、それが、エンカンタダスなる名前の起源ともなっている (NN 127-128) と言うわけである。むろん、この100レグアと言う数値が、アゾレス諸島西方100レグアをもって、ポルトガルの為の東インドと、スペインのものとなるべき西インドを区切ったボルジアの教皇アレッサンドロ6世によるトリデシリャス条約を想起させ、長年にわたって海図に描かれ続けた二箇所にあるエンカンタダスとは、ローマ教皇庁が認めた二箇所のインディアスの存在を揶揄するものである点にも留意しておくべきである。いずれにしろ、このエンカンタダスでは、唯一、不動である筈の大地も漂うとしか思えず、火・土・水・大気が、つまり、古代以来、宇宙を構成してきたはずの四大元素が異様にせめぎ合う異次元界を作り上げているのである。しかし、ここでも、話者は、ギリシャ神話の冥界の例えに続けて、“In no world but a fallen one could such lands exist.” (NN 127) と付け加え、墮した世界にしか存在し得ない土地と評し、この世のものとは思えない異質さを伝える描写を行っているかのように発言しながら、楽園追放後のこの世界にしか属し得ない島々であり、古代ギリシャの世界観とキリスト教思想とを共に引き受ける空間としている。

冒頭で読者が想像力を働かせるよう迫られる灰山と空き地の拡大画像は、鳥瞰図の視点を試みた際に初めて想像できる光景であり、現在であれば、CGやSFXで提供される画像である。視点の移動、パースペクティブの変更を促す仕掛けなのである。第2スケッチにおいても、話者が、ふと、甲板に放し飼いにされたガラパゴス象亀に興味を抱き、じっと眺めていると、食糧となるはずの3頭の象亀は、大洪水以前の地中から這い出してきた異界の怪物に見え始め、大地を支えるヒンドゥー神話の大亀に見え、傷跡の残る苔むした甲羅は膨張し姿を変え、壮大な様で朽ちてゆく3基のローマの円形競技場となる (NN 131)。象亀は縮尺を換えるだけでなく、創世記と、インド神話と、ローマ帝国と言う旧世界の基層となる文明を重ね合わせた存在となっている。さらに、第3スケッチでは、話者は、Rock Rodondo, or Round Rockと名付けられた切り立った岩島を孤立する高い石の塔に比して紹介しながら、聖マルコ大伽藍の鐘楼、ニューボートの謎の石塔や、倒壊した城塞のなごりの石塔からの視点を推薦する (NN 133-134)。そして、第4スケッチでは、この岩島からの眺めをピスガからの眺めに比して、約束の地を見降ろすモーゼを想起させながら、決して見える筈のない南アメリカ大陸の太平洋岸の無人諸島を紹介し、さらに、ポリネシアにまで言及し、「我々の居る相対的位置を確認した」(NN 139) とする。ここで話者が示唆するのは、旧約聖書から、大航海時代以前のノース人の新大陸植民の伝説であり、執筆期に至るまでの入植活動の歴史であり、その歴史の到達点となったエンカンタダスの位置である。メルヴィルは、鳥瞰図の断片を提示する事によって、鳥瞰図を描き出せる視点を創り上げるよう指示しているのであり、また、その物理的距離概念から解放された視点に、人類の歴史を重層的に捉える通時的視点をも重ね合わせようとしているのである。エンカンタダスは、通時的マイクロコズムなのである。1854年3月号にまとめて掲載された4篇のスケッチは、地理的・博物学的記述を目指しながら、比喩を重ねて、脱線を繰り返す話者の饒舌さのために取り留めのない思いつき話であるかのように読める。しかし、この4篇に流れる通奏低音は、時間と空間を超えた宇宙的な視点である。

通時的 세계観を感得していながら、その視点を確保する能力も体得しておりながら、その本質を表現能力の稚拙さの故に伝えられないもどかしさを具現化しているのが、この話者ではなかろうか。彼が比喩的にしか伝えられない抽象的、且つ、神秘的知覚を伝え得る媒体として、象亀の姿に感応するのであり、そのせいで、象亀が彼の意識に取り付いて離れないのである。第1スケッチの題辞の「渡し守」が告げるとおりに、話者は、彷徨する浮島の基に根を降ろしてしまったのである。彼は、時空を超えたマイクロコズムとしてのエンカンタダスを象亀を通じて感得し、日

常的視界を超えた認識を伝えるために隠喩と直喩で語らざるを得ないのである。ゆえに、ニュー・イングランドの文明社会に帰還した後も、たとえば、アディロンダック山中で「神秘的な自然の影響下」に浸ると、乏しい水を求めて緩慢な移動を続ける象亀の姿が蘇り、「邪悪に魅せられた地」(NN 129)で眠り込んだとしか思えない経験をする。むしろ、19世紀の都会人としては、眠り込んだとしか、あるいは、「自分自身が抱え込んでいる鮮烈な記憶力、空想力の目くらまし、時に陥る目の錯覚」(NN 136)のせいであるとしか合理化できない固着である。お伽噺に格下げされたリップ・ヴァン・ウィンクルの伝説に隠された、時空間を超える幻視を追体験したとは認め難いのである。しかし、「特に古びた豪邸で蠟燭の灯火の下、社交の楽しみが展開する時...部屋の隅が寂しい森林の幽気漂う下草を思わせ」、甲板のカンテラの火が記憶の中に蘇ると、「その部屋の隅から巨大な象亀が甲羅の上にMemento\*\*\*\*と蠢く文字を燃え上がらせながら這い出て来る姿が見えて、知人に気取られるほど狼狽えるのである」(NN 129)。意識下に圧殺できない認識である。

では、この甲羅の上に燃え上がる“Memento\*\*\*\*”とは何か。NNは、Putnam's, *The Piazza Tales* も共に5個のアスタリスクを配しているが、メルヴィルは、‘mori’を想記させるつもりであったはずである(NN, 607)として本文そのものにも訂正後の4個のアスタリスクを配している。また、Beaverも、「5個のアスタリスクながら、明らかに‘memento mori’である」(431)と注を付けている。ただ、例えば、Berthoff版では、アスタリスクは5個あり、初版に忠実なままである。アメリカ合衆国の古典教育を云々する以前に、通常、“memento”は、“mori”に続くだけである。それを、アスタリスクに換えても、特に効果を上げられるものではない。文章内の連続したアスタリスクは目立つものであって、校正ミスとも考えがたい。わざわざ、5個のアスタリスクを配した事には判じ物をさらに一つ付け加える以上の理由があったはずである。「死を覚えよ」が活字で燃え上がるよりは、むしろ、僧房に安置される髑髏が燃え上がっているとする方が、よほど効果的であろう。いずれにしろ、カトリックの象徴であり、異なる連想を呼ぶものではない。そこで考えられるのは、“penitential life”を示唆する“memento vitae”と言う提案(Fisher 37)である。象亀は、水夫達の好む迷信によると、悪徳高級船員、特に、提督や船長の成れの果てである。甲羅に幽閉され、炎熱地獄とも言うべきエンカンタダスの孤独な君主となり生き続けるのである。話者に依れば、島の情景に加えて、象亀が、奇妙に自罰性、自縛性を漂わせ、途方もない年月を生き続ける姿が迷信の由来である(NN 129)。生存そのものが緩慢な拷問となる生である。「奴隷同様、奴隷以下」と言う例えで表現される下級船員<sup>13)</sup>の実感からは、象亀こそが暴君の末路にふさわしいのである。苛酷な日常を送る平水夫が、死にも勝る苦痛として想像し得る生の形態である。これ以上の隠喩があるなら、それは、奴隷が想像する煉獄であろう。生と死は、お互いに排除し合い、拮抗するだけの対立概念では無く、死を内包する生、死に際してのみ生命力を感じるほどの無機質な生、生存を苦役として幽閉する生と、脱却をかなえる死、死のみが生きた証になる生などと言葉が空回りするほどに連続しており、一体なのである。悪徳船長が幽閉される甲羅、乏しい水を求めて引きずるように彷徨する数百年の生涯の記号でもある象亀が表すものは、速やかな死による解放を望むような生であろう。

話者は、エンカンタダスを“Apples of Sodom”(NN 128)になぞらえてもいるが、ソドムの林檎とは、フラウィウス・ヨセフスに依れば、触れた途端に煙と灰になってしまう林檎である(Beaver 431)。林檎が、生命・実り・豊饒・美などを表すものであれば、それが、人をたぶらかし、落胆させる生命の象徴となり、また、死をもたらす手の象徴ともなり得るのである。死を内包した生命を表すとも考えられる。また、見せかけだけの、食べられない林檎は、無意味な生命とも、生

命の無意味さを象徴するとも考えられる。ならば、無に終わる緩慢な拷問のような生を表すと考えてもよからう。さらに、ヨセフスは、皇帝ネロのユダヤ攻略戦において籠城、自刃を約して陥落、敗軍の敵将として捕虜となり、奴隷身分の戦略家としてヴェスパシアヌスの陣内で、エルサレム陥落を見た。ローマ市民権を与えられ、ユダヤ滅亡史の著者となり、「十九世紀にいたるまで、絶えず西欧キリスト教世界において...永遠につづく苦悩と彷徨を余儀なくされた民の罰の証人であった」人物である<sup>14)</sup>。彼自身が、砦内のユダヤ人に自決を命じながら生き延びた指揮官であり、配下の恨みを買ひ、象亀に変身する提督や船長と重なり合う。ユダヤ王国の壊滅に手を貸し、皇帝ヴェスパシアヌス邸に起居し、ユダヤの敗北と隷属に至る歴史を記述し続けた。彼は、ユダヤ民族の歴史の甲羅を負い続けたのである。

そのヨセフスの史記にイドマヤ人に関する記述がある。紀元前129年に、ヤコブ・イスラエルの子孫が、「シリアの軛から解放されたばかりのユダヤの地に、祖先と同じ遊牧生活をつづけていたイドマヤ人の住む南部の草原地帯を併合した。そしてユダヤ教史としては珍しく、力によって彼らイドマヤ人をユダヤ教に改宗させた。」(アダス＝ルベル136)件である。メルヴィルは、比喩を重ねてエンカンタダスの乾燥を例え続けるなかで、通常は、“Edom”と記されるユダヤの民が彷徨した荒地を、敢えて、“Idumea”と綴り、その5行後に、乾ききって割れた“Syrian gourds”を配置している。イドマヤ人は、ヤコブの兄エソウの末であり、ユダヤ民族の割れた瓢箪の片割れである。民族宗教を理由に度々領土を失ひ、奴隷化されたユダヤ人が、起源を共有する同胞に対して領土併合と強制改宗を同時に行った事は、領有と文化的同化が表裏一体であり、旧来の生活続ける側に課せられる隷属の形であり、新大陸征服の基本原理解が、古来からの人類の生存競争の形である事を示唆している。そして、この割れた瓢箪は、メルヴィルが予見していたアメリカ合衆国の分裂を重ね合わせてもいるのであろう。

この作品全体を通じて、固有名詞に注目してみると、謎かけの一つが読み取れる。まず、島の乾燥度を想起させるラザロは、貧窮の日々から天国へと救われるルカ伝のラザロであり、通常想起されるヨハネ伝の蘇りのラザロではない。NN版では、“iguana”、“Atacama”と修正されているが、初版に忠実なBeaverによると“aguano”、“Aracama”となっており、各々訳の分からない外国語、固有名詞として読み飛ばされるように配慮しながら、不正確な綴りで読者に提供されている。通常Edomと記される乾燥地帯も古い“Idumea”を選んで、逆の連想が浮かぶようにしている。さらに決してガラパゴス諸島とは言及されない島々に特有の亀は、“Gallipagos”と綴られ、第3スケッチの“Rock Rodondo”も、厳密には“Redonda”(Beaver 433)であり、第4スケッチで言及される“Teneriffe”も厳密には“Tenerife”である。固有名詞すら恣意的で、不安定であり、想起されるべき事物の本質とも、比喩が指し示す観念連想とも、強固に結びついているわけではない。命名が、秩序を約し、支配・所有を正当化するものでは無い事をほのめかしているのである。

続く第2スケッチの題辞は、死と呼ぶに相応しい破壊力を備えた醜悪な魚として描かれる鯨、その醜悪さが魔女により姿を変えられたものであると教える巡礼、その巡礼の杖に恐れを為してオケアヌスの妻テティスの懷に逃げ込む鯨の群を題材としている。しかし、メルヴィルは、鯨と魔女に言及する詩文を省略し、リヴァイアサン像を浮かび上がらせながら、お伽噺の登場人物像を読者の視界から隠し、スペンサーの寓話から、具象性を排除しようとしている。外観と本質の乖離を抽象化して、獐狂で臆病な被造物を提示して、「象亀の二面性」と題するスケッチの為の序としているのである。このスケッチも、冗談めかした語り出しで、灼熱地獄のエンカンタダスで楽しくしていたければ、簡単な事、“find one the gayety, and he will be gay”(NN 130)と、つまり、自分で探せと言う命令形で始める。そして、会話のための会話で人を煙に巻いて楽しむかのよう

に、裏返せば自力では元には戻れない象亀の腹側の明るい色調を楽しめば良いと提案する。ここで、話者は、突如、巡回説教師のような口調になる。

But after you have done this, and because you have done this, you should not swear that the tortoise has no dark side. Enjoy the bright, keep it turned up perpetually if you can, but be honest and don't deny the black. Neither should he who cannot turn the tortoise from its natural position so as to hide the darker and expose his livelier aspect, like a great October pumpkin in the sun, for that cause declare the creature to be one total inky blot. The tortoise is both black and bright. (NN 130, underlines mine)

これは、象亀の話ではなく、人生観・世界観の話である。ただ、明暗あわせもった世界で、楽観的世界観を手に入れた者は、視点を逆転させた責任を負い、その不自然な状態を手に入れられない者も悲観論に耽溺すべきではないと言う説教である。但し、暗い方が「自然な態勢」であり、また、収穫を控えた十月のかぼちゃも太陽が沈めば、「快活な方の外観」は消え失せるのである<sup>15)</sup>。しかし、これも第1スケッチで展開した「視点」論が、人生観に転用されているのである。ただ、通時的宇宙的距離感の自由さではなく、パースペクティヴの角度が焦点である。表は暗く、裏は明るい象亀は、二項対立を前提とする視点、例えば、生死、明暗、強弱、美醜、獐猛さと臆病さ、巡礼者とテティス、つまり、キリスト教とギリシャ神話と言うように、対極で宇宙を捉える視点に疑義を唱えるものである。

第2スケッチは、メルヴィルが、Harper's & Brothersに提案した海洋冒険と象亀狩りに題材を採る長編の一部を借用したものと推理されている (Newman 176-177) が、話者は、狩りそのものには参加しておらず、斥候隊が持ち帰った象亀の引き上げ作業を薄暗がりの中で見るだけである。象亀は、生と死を内包する、通時的宇宙像であり、また、この象徴性を見据える視点でもある。ゆえに、甲板上の象亀を観照する話者が象亀に重ね合わせる幻視、幻影は、全てのものの隠喩と成り得るのである。話者の視線は、幻視により、常識を超えて事物の隠れた関連性を見てしまうのである。だからこそ、話者は、ちょうど、リップ・ヴァン・ウィンクルの幻視を拒絶したように、5カ月に渡って航海を続け、陸に連なる物なら何でも美化してしまう夢想的な心理状態に陥っていると断った上で、全宇宙を象亀に照射するのである。

例えば、話者は、3名のスペインの税官吏が眼前の3頭の象亀のように乗船してきたならば、到着した文明人を触りに行く野蛮人のように凝視し、触れに行くであろうと自らの驚きを例えている。話者は、初めて見る象亀と3名のスペインの税官吏を並列させ、それらを見てこの世のものとは思えないと言う驚嘆の念を感じず自分と、初めて文明人を見て驚嘆する野蛮人とを並列にする奇妙に婉曲的な比喻を使っている。いわゆる「最初の遭遇」の驚きを描いているのであろう。この世にいと想像もしなかったスペイン人が税金を取り立てに現れたのである、先住民が驚嘆するのは当然である。特に、スペインの植民地政策は、換金作物栽培による農作物の輸出よりも、金・銀の採掘・硬貨鑄造・貢納・重装備の陸軍・艦隊による本国への送付が経営の基本形態であり、大量の金・銀貨の移送は、フランス系・イギリス系の海賊船の格好の標的ともなり、また、スペイン硬貨が新大陸の通貨として流通した一因ともなっていたのである。(Blackburn 137-139, 495) スペインの植民地経営の象徴的人物像は、合衆国南部のような大農園主ではなく、黒服の税官吏なのである。ゆえに、話者は、象亀を、喪服のように黒く、金属製の櫃のように重く、苔蒸して海岸で朽ち果てる紋章の付いた楯に、つまり、海岸に打ち上げられた難破船の残骸に例えるのである。新大陸で徴収した金・銀を詰めた頑丈な錢箱を運ぶために、膨大な数の艦船を動員し、海賊の襲撃に備える下級貴族を警護に付け、数知れない海難事故を経験したスペイン帝国の黒服



の官吏達を想起させる幻視とするのである。

次に、傷ついた城塞都市としての象亀が、話者の幻視の中に浮かび上がる。彼は、亀に呼びかけるのである。“Ye oldest inhabitants of this, or any other isle, said I, pray, give me the freedom of your three walled towns.” (NN 131) そして、生きた鎖帷子の甲冑に守られて、丸々1年間食糧がなくても生き続けられるエンカンタダスの象亀の「時」の襲撃にも耐え得る生命力に感嘆する。「三つの城塞都市の自由を我に与えよ」とは、何を意味するのか。三頭の亀を目前にしていたために思い付いただけの数であって、ヨーロッパのどこにでもある、一年間の兵糧攻めに持ちこたえられる程度の中世都市を指すのか。それとも、アステカ・マヤ・インカの巨石ピラミッド文明を指しているのか。それとも、エンカンタダスと並べて言及する太平洋岸の三つの群島を指しているのか。また、城塞都市の持っている自由と同等の自由を我に与えよと封建支配からの解放を主張しているのか。あるいは、自由を譲渡して屈従せよ、と郑重に要求しているのか。それとも、話者個人が、甲羅が確保する自己防衛の安全性の中に幽閉される程度の自由を欲しているのか、曖昧である。ただ、どこにあらうとも、先住者に依頼している事と、自分の自由を取り戻したいのか、他者の自由を奪いたいのかは判然としませんが、自由を望んでいる事だけは明らかである。城壁を築いてでも守らざるを得ない自由、侵害され得る程に重要な自由を守るための戦が続いているのである、故に、城攻めの跡を調べるかのように、話者は、甲羅の苔を削り落として、島の山奥で転落しては負ったと思える傷跡を、“scars strangely widened, swollen, half obliterate, and yet distorted like those sometimes found in the bark of very hoary trees” (NN 132) と検証する。古木の樹皮に残る傷跡のように、傷口が広がって腫れて、忘れられかけて歪んでいる傷跡は、明らかに治癒した生物の傷である。死のみが解放と思える苦渋の生存は侵害された自由を内包し、重い甲羅の中に幽閉され、その甲羅が負った傷は忘れられかけて苔に覆われている。甲羅の傷跡は、城壁の毀損や崩れではなく、黒人奴隷の背中の鞭の痕である。話者は、“incredible creatures whose very ghosts are now defunct” (NN 132) が、粘土板に残した鳥の爪跡や文字を研究する地質学者のように、甲羅の傷跡をなぞるのである。奴隷の背中に残った鞭の痕は、扇状に広がった鳥の蹴爪の跡が歩き回ったかのように重なり合い、地獄に堕ちて魂そのものが滅亡している信じ難い被造物、つまり、農園の監督官や奴隷所有者の意図・気質・残虐性・加虐趣味は、古代文字のように解読できるのである。

ハンモックで眠りにつこうとする話者は、よっぴて甲板を直進する象亀の動きに耳を傾けずにはいられない。止まってしまっていた亀は、船の中央帆柱に衝突し、そのまま押し続けていたのである。“I have known them in their journeyings ram themselves heroically against rocks, and long abide there, nudging, wriggling, wedging, in order to displace them, and so hold on their inflexible path.” (NN 132) 英雄的に、破城槌のように押し進み、岩があれば留まって、とにかく移動させる象亀は、いかなる天然の障壁が立ちほだかろうと、意に介せず、駐屯し土木工事を施して軍用道路を延ばして行くローマ軍団の直進する姿を思わせる。帝国拡大と維持の根幹となったローマの道である。コロセウムにも見えた亀が動き始めれば、長楯で亀の陣形を取った重装歩兵軍団の移動と見まがうものでもあったろう。

そして、話者は、先頭の象亀の背の上に“sitting crosslegged”，二人のブラーミンを引き連れ、三人の額で，“universal cope” (NN 132) を支える自分自身の姿を夢に見る。大地を支えるヒンドゥーの亀、ローマ軍団、新大陸の富を作り出した黒人奴隷の背の上で話者は、胡座をかいて、インド亜大陸の最上カーストの知識人を、あるいは、脚を組んで、超絶主義に東洋哲学を取り込んだボストンのブラーミンを引き連れている。しかし、西洋文明を代表する話者は、東洋の知性を

付き従えて、世界を覆うカトリック僧侶の儀礼用外套を支えるのである。中南米全域を覆うカトリック教会の権威に加えて、メルヴィルの周辺でも、アイルランドからの新移民流入が続き、アメリカ大陸のカトリック化に怯える“Nativism”がニュー・イングランドで勢力を拡大していた時期である。続く第3スケッチは、カトリック教会の階層序列や儀式への比喩に満ちており、次章への準備を施していると言えよう。

このブラーミンの夢の後、話者は、日常生活を取り戻し、3頭の象亀を同僚とともに食べてしまう。そして、背側の甲羅をスープ容器に、腹側の甲羅を名刺盆に削り上げ、磨き上げた、と軽快なアンタイ・クライマックスで第2スケッチを締めくくる。しかしながら、“soup-tureen”も“salver”も上流家庭の備品であって、正式の晩餐に、あるいは、執事が正式の訪問客に差し出す什器である。夜陰に乗じるかのように本船に引き上げられた象亀が、誘拐され、奴隷とされた黒人を想起させるゆえに、食人行為にも例えられた奴隷制度と、その収益で支えられるアシエンダの日常を揶揄するものとも考えられる。また、西洋が、文明と野蛮の境界を食人の習癖に定め、例えば、「改宗しない食人者を除いて」インディオの奴隷化を禁じた女王イザベラの勅令に対応して、「食人証明書作成の任を帯びた公証人をひきつれて」実施された奴隷狩り（正木45-51）をも示唆しているかも知れない。

Dillingham は、白鯨が『白鯨』全体に影を落としているように、象亀が「エンカンタダス」に影を落としており、白鯨と同じように狩りの対象となり、さらに、象亀と同一の“in a cycle of metaphoric cannibalism”に陥った人物像に食べられてしまう象亀に“poignancy of the tortoise as metaphor and symbol”と、痛ましさを見ている<sup>16)</sup>。確かに、作品全体に生存の痛ましさが漂っており、食糧とされる象亀に、生存競争と弱肉強食の犠牲者像を投影しても不思議ではない。しかしながら、象亀は、ヒンドゥーの世界観、ローマ帝国の壮大さ、兵糧攻めに耐える自由城塞都市の住民の気概の象徴ともされており、常に保存可能な蛋白質としての犠牲者像を象徴しているわけではない。むしろ、1839年に西欧に紹介されたせいで、中世からの伝統の“bestiary”に拘束されることなく、既知の動物があてがわれた寓話的役割・象徴性から自由で、メルヴィルが自由に象徴的意味を付与し、記号化できた被造物と言えよう。

スケッチ3の題辞は、頻出する“fowl”に続く“bird”と言う単語にも、猛禽のイメージを重ね合わせ、不気味で猛猛な鳥類の存在を想起させるべく選ばれている。本文中でも、話者は、“Fancy a red-robin or a canary there! What a falling into the hands of the Philistines, when the poor warbler should be surrounded by such locust-flights of strong bandit birds, with long bills cruel as daggers.”(NN 135)と小鳥との対比を強調して、読者の想像力を伝統的な観念連想から切り離そうとしている。

話者は、この岩島を“that mysterious Newport one, or... the famous Campanile or detached Bell Tower of St. Mark”(NN 133-134)に例えており、前者が謎を表すものであれば、後者は、権威と階層性を表すものである。この岩島は、ほとんど直立に近い岩の柱であって、層に従って海鳥が“order of their magnitude... dominating one above another”(NN 135)と、階層序列を象徴するかのように棲み分けを行っており、層と層とを区切る“encircling shelves”(NN 134)が段々に張り出して、下層の鳥は、上層の構造を支えているかのように見えると伝えている。話者は、ここで、海鳥の住み着く岩棚を軒先に例えながら“as the eaves of any old barn or abbey”(NN 134)と、納屋と僧院が鳥にとっては並列でしかない事を確認し、階層序列を、自然界に投影する人間の視点でしかない事を示唆しながら、その岩島の最下層に棲むペンギンを描写する。

Erect as men, but hardly as symmetrical, they stand all round the rock like sculptured

caryatides, supporting the next range of eaves above. Their bodies are grotesquely misshapen ; their bills short; their feet seemingly legless ; while the members at their sides are neither fin, wing, nor arm. And truly neither fish, flesh, nor fowl is the penguin ; as an edible, pertaining neither to Carnival nor Lent ; without exception the most ambiguous and least lovely creature yet discovered by man. Though dabbling in all three elements, and indeed possessing some rudimental claims to all, the penguin is at home in none. On land it stumps ; afloat it sculls ; in the air it flops. As if ashamed of her failure, Nature keeps this ungainly child hidden away at the ends of the earth, in the Straits of Magellan, and on the abased sea-story of Rodondo. (NN 135)

まず、黒人に関する骨相学の言説を揶揄しながら、奴隷に支えられた経済体制が、示唆されている事は明らかであって、ペンギンの色合いである黒と白に全く触れない事自体が奇妙である。黒人と白人と、どちらにも分類されないムラトの存在を暗示するために敢えて避けたと思われる。ここから、話者は、頭韻の技術をひけらかしながら、ペンギンが分類不可能である事を述べて行く。中世の“bestiary”にも、カトリック教会の食餌規定にも属す事のない生き物である。話者は、ペンギンを例示することによって、本来混沌とした現実には秩序を与えるつもりで、分類し、命名し、整理し、階層序列を付ける事、そして、その分類により、理解し、所有する事の限界を提示しているのである。話者が、この岩島に到達した時刻を、月影の下、ほの白い夜明け前の陽光の重なる頃としているのも、夜でも朝でもない曖昧な、分類不能である時間帯を想起させるためである。ペンギンに続けて、話者は、連綿と自己犠牲の象徴としてキリストになぞらえられてきたペリカンを、灰にまみれた悔悟の絵姿である中世の托鉢僧になぞらえ、伝統が動物にどのような役割を振り当ててきているかを思い出させている。しかし、その直後に、この“penitential bird”は、ヨブが陶片で身を掻き削る場に似つかわしい焦熱のエンカンタダスに相応しいと錯綜した比喩を提示する。ヨブと悔悟は相いれないはずである。ヨブは、到底理解し得ない神の試練の象徴であり、苦悩と悲しみの具現者ではあっても、悔悟の象徴ではない。また、話者は、コルリジのアホウドリを踏まえて、“Higher up now we mark the gony, or gray albatross, anomalously so called, an unsightly unpoetic bird, unlike its storied kinsman, which is the snow-white ghost of the haunted Capes of Hope and Horn.” (NN 135) と、矛盾形容としか言い様のない、名称と連想されるイメージが分離した鳥を例に挙げ、更に、白と言う色彩のイメージにも変更を迫っている。陸地に生息する鳥が一切見られないロドンドを、話者は、“It is the aviary of Ocean.” (NN 135) と言い切るが、これこそ矛盾形容である。

ロドンドの海面下で上層の鳥の餌食となりつつも、人間性を理解せぬままに、釣り針に殺到する無邪気な魚の姿を、“Here hues were seen as yet unpainted, and figures which are unengraved.” (NN 136) と描写し、油絵にも彫刻にも表現された事の無い色彩と形態を指摘して、西洋文明の伝統に則って構築された世界観では対応し得ない現実の世界を提示している。ロドンドは、“Here and there were long birdlime streaks of a ghostly white staining the tower from sea to air, readily accounting for its sail-like look afar.” (NN 134) と鳥の糞が幽気漂う白さで塔を汚し、“Its birdlime gleams in the golden rays like the white-wash of a tall light-house, or the lofty sails of a cruiser. This moment, doubtless, while we know it to be a dead desert rock, other voyagers are taking oaths it is a glad populous ship.” (NN 136-137) と、日中は灯台に、あるいは、大艦船の帆に見えて、航海者を欺くのである。陽光が当たれば灯台に見え、闇夜には荒波で船を引き寄せて座礁させる岩島である。象亀の腹側の甲羅のように、陽光の中でのみ明るく輝く収穫期のかぼちゃの空洞の中心部のように、目くらましなのである。メルヴィルのロドンドは、伝統的な秩序観・観念連想の硬直性、

分類不能で矛盾形容の満ちあふれる現実を象徴し、いかにも航海の安全を保障し、疑似的安定感を与えるかのように「他の航海者達」には見えておりながら、無益で危険きわまりない現行の世界観を揶揄しているのである。

第4スケッチは、このロドンドの頂上からの眺めを描きながら、この話者であるクレオルが、太平洋岸の離島に上陸するに至った背景を列挙するものである。表題は、“A Pisgah View from the Rock”であり、題辞は、同じく『神仙女王』からの2行であるが、むしろ、ピスガの頂上から約束の地をモーゼに見せる神を描く旧約聖書からの引用かと見まがうものである。本文は、再び、冗談めかせた語り口で、ロドンドからの広々とした眺めに比喻を重ね合わせるものであるが、月面上の男の視界と比したり、ミルトンの天上の狭間銃眼からの眺めと比した後、“A boundless watery Kentucky. Here Daniel Boone would have dwelt content.” (NN 137) とケンタッキーだけでは満足しなかったかのようにこの初期の開拓者に話題を転じる。ケンタッキーは、1792年に合衆国に加えられた最初のアパラチア山脈以西の州であり、合衆国拡張の第一歩を印す州である。となれば、「約束の地」、「明白なる天命」、文明化の「使命」などの成句で押し進められた領土拡張政策の視野に入る地域が途方も無い事を示唆している。「約束の地」を見る視点は、天上に置かれており、全世界が潜在的合衆国領土として「明白なる天命」の対象とされているのである。

1823年までに中南米の独立は達成された事になりはしたものの、帝政・共和制・民主制・中央集権国家・連邦国家制など、政治体制そのものが試行錯誤の対象となって、各政権は不安定なままで、合衆国の政体を中南米にあまねく広めて新大陸全域の安定を計ろうと言うPan-Americanismが、声高に喧伝される一因となっていた。あからさまな挑発で開戦に持ち込み、楽勝に終わった米墨戦争の結果、1848年のGuadalupe-Hidalgo 条約によりアメリカ合衆国は広大なメキシコ領を吸収した。旧スペイン植民地の併合・属国化に乗り出したのである。本作品執筆の6年前の事である。翌年から、カリフォルニアのゴールド・ラッシュが太平洋岸との速やかな交通の便を要求するようになったため、パナマ地峡にも触手を伸ばそうとして「メキシコ全域」を主張する拡張論が台頭する。この拡張論派に対抗し得た議論としては、例えば、大統領候補とも目されたサウス・カロライナのジョン・カルフーンが、メキシコの土壌は奴隷作物の栽培に適さないと考え、自由州の増加を阻止すべくメキシコ領有に反対した事であり、また、総人口の6分の5を占める有色人種を如何に再構成出来得るのかと言う人種論であった。そして、まさにこの大量の有色人種はアメリカ合衆国市民権を付与するに値しないと言う議論が、全メキシコ併合論を制したのである<sup>17)</sup>。モンロー主義を他国に対する内政不干渉政策を擁護するものと誤解するのではなく、ヨーロッパ列強の西半球への介入拒否、即ち、西半球の盟主としてアメリカ合衆国が君臨する意図を表明したものと理解しておくことが必要であろう。宗主国と植民地と言う縦の主従関係で分断されて支配を受けるのではなく、ヨーロッパから独立したアメリカ大陸全域で、合衆国の勝利が確実である新大陸固有の生存競争を始めようとしていた時期である。

ケンタッキーに言及する話者は、続いて“Never heed for the present yonder Burnt District of the Enchanted isles. Look edgeways, as it were, past them, to the south.” (NN 137) と言い、おもしろい物が、南の方角にあって、この海からつながる南極なのだ、と再度アンタイ・クライマックスの話芸を試みているかのような発言をする。しかし、“Burnt District”は大文字で始まる固有名詞扱いである。むしろ、エリー運河の開通による社会変化に呼応するかのように第二次大覚醒や社会改良運動が熱を帯びた“Burnd-Over District”への言及である。この地域から勢力を強めたモルモン教徒は、一夫多妻制を標榜し、実行したため、周囲の道徳改善運動熱の中から押し出される様にして、1846年に「新しいシオン」を建設するべく、後のユタ準州へと集団移住して行った。ニ

ユー・ヨーク州としては、厄介払いが出来て僥倖とも言えるべき大脱出であったろうが、モルモン教徒の目指したユタは、1848年の条約により晴れて合衆国領土となった地域である。彼らは、宗教的迫害を逃れて「約束の地」を荒野の果てに求めたユダヤの民とも、清教徒とも重ね合わされていよう。しかしながら、メキシコ領に侵入して行ったモルモン教徒の姿は、たとえ父祖の地と言えども、既に居住者の居たカナンに再定住するユダヤの民、あるいは、マサチューセッツ部族の地に侵入した清教徒が、先住者には侵略者でしかない事を示唆するものであろう。信教の自由を求めて移住する新天地と言うイマジエリーが、侵略を正当化して来たために、侵略を正当化する大義名分として宗教的イマジエリーが利用されているのである。領土欲が、「明白なる天命」と命名されて宗教的情熱にすり替えられれば、社会正義であるかのように聞こえ始めるのである。話者は、マスアフエロ島の洞窟の景色を、“old cathedral with its gloomy lateral chapels” (NN 138) に例え、長い航海の後に、この洞窟に漕ぎ寄り、“beholding some tatterdemallion outlaw, staff in hand, descending its steep rocks toward you, conveys a very queer emotion to a lover of the picturesque.” (NN 138) と、壁掛け用油絵の図案を思い出したかのように語るが、エジプト王の奴隷となった自国民を脱出させ、追手をかけられたモーゼは、エジプト王にとって明らかに無法者である。これは、羊飼いの杖を握って砂漠を彷徨したモーゼが、岩山を下って来る図柄なのである。信教の自由と民族の解放を具現して、さらに、父祖の地を奪回するモーゼが、カナンに足を踏み入れられず、反対側にしか下山できなかった結末に何らかの正義を感じているのでは無からうか。少なくとも、モーゼ本人は、侵略者にはならなかったからである。

しかし、ニュー・ヨーク州北部の「燃え広がった地域」は、今のところ無視すればよいのである、なぜならば、南の方角を見ても、“You see nothing” のままに、足元から南極までつながっている“certain interesting objects” (NN 137) とは、中南米全域に定着した奴隷制度が、モーゼの出現を切望する、あるいは、危惧する人々を抱え込んで、一触即発の状況にあるからである。メルヴィルは、南北戦争の到来を懸念していたと思われるが、その後の中南米の展開にも危惧観を抱き、エンカンタダスを中南米の記号として、私家版予言書の作成を試みているのではなからうか。

話者は、太平洋岸の三つの群島、ガラパゴス、聖フェリックスと聖アンブロウス（現ロス・デスヴェンツラドス）、ファン・フェルナンデスについて、“We are at one of three uninhabited clusters,” (NN 137) と言いながら、“Though I know of no account as to whether any of them were found inhabited or no,” (NN 139) と「発見」された時点においては、人が住んでいたかも知れない、つまり、先住民の殲滅をほのめかすのである。そして、その「発見」の歴史を語りながら、これらの島々に小舟で近づけば、“surely he must be their first discoverer”と感じる事、そして、第一発見者であると思ひ込む事が、実は、“the mode in which these isles were really first lighted upon by Europeans” (NN 138) と、ヨーロッパ人の視点から見た場合に過ぎない事も付け加えている。さらに、“I doubt whether two human beings ever touched upon that spot. So far as yon Abington Isle is concerned, Adam and his billions of posterity remain uncreated.” (NN 141) と、ただ視点を逆転させて戯れ言を言っているかのように見せながら、アダムの子孫が「発見」しない限り、たとえ一人の先住民が到達していても、島は存在しないものとなる事を言う。なぜならば、

ヨーロッパは世界を地図化する。... その結果世界地図はおおむね、ヨーロッパが直接認識した世界の表象という性格を強めることになった。「認識」は同時に「領有」や「支配」を伴うことが多かったから、世界地図の完成はヨーロッパによる世界支配の完了を意味する。ヨーロッパは地球をひとつの「世界」にした。だがその「世界」とは、ヨーロッパを中心とする「近代世界システム」だったのである。(正木 118-119)

この地図化に伴う領有と支配の具体的な始まりが命名である。話者は、個別の島々に順次言及して行くかのように装いながら、命名の意味あいをはのめかすのである。

Ranging south of Abington, and quite out of sight behind the long spine of Albemarle, lies James's Isle, so called by the early Buccaneers after the luckless Stuart, Duke of York. Observe here, by the way, that, excepting the isles particularized in comparatively recent times, and which mostly received the names of famous Admirals, the Encantadas were first christened by the Spaniards; but these Spanish names were generally effaced on English charts by the subsequent christenings of the buccaneers, who, in the middle of the seventeenth century called them after English noblemen and kings. (NN 141, underlines mine)

話者は、「ところで」、と断って、あたかも余談であるかのように、島々のスペイン語名が英語名に変わった経緯を説明している。17世紀中期に、太平洋岸の制海権を樹立した英国の国家事業の栄光とは、海賊の活躍によるものであり、彼らが、貴族や国王に忠誠を誓ってスペイン領を奪い、例えば、王弟、後に名誉革命で亡命するジェイムズ1世に島を捧げている事を実例としているのである。さらに、ニュー・ヨークの読者向けの短編であるから、王政復古を果たしたチャールズ2世が、ニュー・アムステルダムを制し、ニュー・ヨーク領として弟、ヨーク公に与えた事も示唆していたであろう。さらに、メルヴィルの母、Maria Gansevoort Melvilleは、ニュー・ヨーク州ガーンズヴォート村の創立者の一門であり、ヨーロッパ列国の植民地争奪の姿を目の当たりにした一族である。地名が覇権と所有を意味することは自明であった。ゆえに、第4スケッチの締めくくりは、島々の英語名の羅列の容を呈するのである。所有格形の目立つ名称が続いている。

Still south of James's Isle lie Jervis Isle, Duncan Isle, Crossman's Isle, Brattle Isle, Wood's Isle, Chatham Isle, and various lesser isles, for the most part an archipelago of aridities, without inhabitant, history, or hope of either in all time to come. But not far from these are rather notable isles——Barrington, Charles's, Norfolk, and Hood's. (NN 142)

話者は、スペイン人航海士ホアン・フェルナンデスの太平洋岸での航路開拓の試みと、「ガマが同様にヨーロッパに関して行った」航海を並べ合わせた後、冗談めかして、“the Kingsmills, a nice little sail of, say 5000miles.” (139) と、ポリネシアにまで視野を広げ、“Kingsmills”なる地名が在る事にふれている。1892年にイギリス領となるギルバート諸島の港である。命名が、メルヴィルの死後、領有につながっている。ヴァスコ・ダ・ガマを引き合いに出して、東洋貿易へのヨーロッパの情熱を想起させようとする真意は明らかである。インド領有、中国支配を確立した英国の覇権の拡がりを示し、さらに、その勢力圏に食い込もうとする合衆国の姿を、1812年戦争期にヴァルパライソで2隻のイギリス艦船との戦闘に破れ沈没した海軍のエセックス号の作戦行動を描く第5スケッチに映し出している。中国貿易と捕鯨業のための中継地点としてハワイ王と1849年に和親条約を結び、1853年には浦賀にペリー提督を派遣していた当時のアメリカ合衆国の姿をも映し出すものである。先住民の肌の色や人口を勘案して、領有か属国化を決定するのであろう。

第4スケッチまでが、パトナムズ誌の第一回掲載分であって、メルヴィルは、次号掲載分の予告で締めくくっているが、その直前に、大きなどんでん返しを滑り込ませている。エンカンタダスに関わった忠誠心に富む海賊達の話“we shall hear anon. Nay, for one little item, immediately,” (NN 142) と一旦、話を逸らせかけて、突如、戻すのである。彼は、“Cowley's Enchanted Isle”なる名前の島を取り上げ、群島全体が魔法にかかっておりながら、さらに個別に「カウリーの目くらましの島」と呼ばれる島に関して、特に読者の注意を喚起しているのである。この“excellent Buccaneer”と紹介されるカウリーは、初めて島を訪れた際、数カ所から眺めた島が、あまりにも

種々異なる形に、時には、崩壊した要塞に見え、また、大都市に見えたために「カウリーの目くらましの島」と自ら命名すると記録に残したのである。むろん、要塞が、数年の内に崩壊したり、大都市に成長する合衆国開拓の歴史を重ね合わせたものとも考えられる。しかし、話者は、出し抜けに、海賊のカウリーと、同時代の形而上詩人Abraham Cowleyとの縁戚関係の可能性に言及し、気質の類似性を示唆するのである。

That Cowley linked his name with this self-transforming and bemocking isle, suggests the possibility that it conveyed to him some meditative image of himself. At least, as is not impossible, if he were any relative of the mildly thoughtful, and self-upbraiding poet Cowley, who lived about his time, the conceit might seem not unwarranted; for that sort of thing evinced in the naming of this isle runs in the blood, and may be seen in pirates as in poets. (NN 142, underlines mine)

「瞑想にふける自画像」や「穏やかに思慮深く、自己批判的な」とは、自らの良心に偽りが無いかを問いつけるピューリタンの心性、あるいは、自己分析の能力を指すのであろう。ならば、エンカンタダスの英語名に自らの名前を冠して、自分自身の幻惑と限定するカウリーは、エンカンタダスに特殊な地の霊を付与して怯える多数の船乗りとは異なり、珍しく、幻惑は全て自分自身の視点に起因すると察知した人物であるがゆえに「秀逸なる海賊」と話者に依り命名されるのである。すなわち、メルヴィルが、サルバートル・ターンムアを媒体として語らせる、脱線を繰り返す取り留めの無い荒唐無稽な博物誌、無聊を慰める水夫の冒険譚と言う物語の形態そのものが、目くらましである。形而上詩人の“conceit”のように、最もかけ離れた事物を結び合わせて驚きを誘うための饒舌、知的言葉遊びと見せて、論点は決して収斂させず、細かい無数の焦点を拡散させるべく、固有名詞の綴りを微妙にずらし、単語の明示的意味と暗示的意味を衝突させ、錯綜し、相打ち消し合う隠喩・直喩を多様し、比喩に引喩を積み重ねて、西洋文化の伝統が準備したイマジネリーを揺るがせ、言葉によって秩序づけられた筈の世界観を偶像破壊の対象としているのである。重ね合わされた比喩は、重層的な映像としては、何ら画像を結ばない。多面的な立体像として複数の視点からの解釈を要求するが、決して、一つの統合体としての姿は見せないものである。クレオールにしか語り始められない筈の、新たな文化混淆が着実に進んでいる新大陸だからである。

## 注

- 1) Herman Melville, “The Encantadas, or Enchanted Isles” in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*. eds. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern U.P. & The Newberry Library, 1987) pp.125-173, 600-617. 以後、当版よりの引用には (NN) を付す。
- 2) 克明に当時の出版状況を調査した結果、メルヴィルの短編としての予告記事、メルヴィルの最新作の連載第一回部分を賞賛する記事が特定されている (NN 601) が、多数の一般読者の目に触れたとは考え難い。
- 3) Warner Berthoff, *Great Short Works of Herman Melville*, Introduction to “The Encantadas or Enchanted Isles” (New York: Harper & Row, 1969) p.98.
- 4) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Herman Melville* (Boston: G. K. Hall, 1986) pp.176-178.
- 5) Marvin Fisher, *Going Under: Melville's Short Fiction and the American 1850s* (Baton Rouge: Louisiana State U.P., 1977) pp.28-29.
- 6) Carolyn L. Karcher, *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America* (Baton Rouge: Louisiana State U.P., 1980) pp.109-111.

- 7) Harold Beaver, Introduction to *Billy Budd, Sailor and Other Stories* (Harmondsworth: Penguin, 1967) p.429.
- 8) Edmund Spenser, *The Faerie Queene* (London: William Ponsonbie, 1596) rpt. with an Introduction by E. de Selincourt (London: Oxford U. P., 1961)
- 9) *Out of Many: A History of the American People*, eds. John Mack Faragher et al. (Upper Saddle River, N.J.: Prentice Hall, 1997) pp.29-31.
- 10) Sir Walter Raleigh, "Fight with the Armada" (c 1592) in *The Norton Anthology of English Literature*, vol I (New York: W. W. Norton, 1974) pp.755-762.
- 11) Robin Blackburn, *The Making of New World Slavery: From the Baroque to the Modern 1492-1800* (London: Verso, 1997) pp.59, 219-220.
- 12) 正木恒夫, 『植民地幻想: イギリス文学と非ヨーロッパ』(東京: みすず書房, 1995) p.188.
- 13) メルヴィルの描く水夫像に関しては, 拙論「『ホワイト・ジャケット』の中のアメリカ合衆国」(大阪音楽大学研究紀要, 第23号, 1984) pp.40-55を参照されたい。
- 14) ミレーユ・アダス＝ルベル, 『フラウィウス・ヨセフス伝』, 東丸恭子訳(東京: 白水社, 1993) pp.4-5. その他, ヨセフスに関する記述は全てこの版による。
- 15) 『ピアザ物語』における太陽の解釈に関しては, 拙論「メルヴィルの『ピアザ』: 1850年代のアメリカ合衆国」(神戸英米論叢, 1988) pp.167-182を参照されたい。
- 16) William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction 1853-1856* (Athens: Georgia U.P., 1975) pp.81-82.
- 17) Frederick Merk, *Manifest Destiny and Mission in American History* (1963: New York: Vintage-Random, 1966) pp.157-169.

(1998年10月1日受理)